

17. Adult T-cell lymphoma leukemia 患者に対するガリウムシンチグラフィ

原田 邦子 星 博昭 陣之内正史
尾上 耕治 長町 茂樹 小沢 美幸
森 由紀子 渡辺 克司 (宮崎医大・放)

Adult T cell lymphoma leukemia 患者 20 例にガリウムシンチグラフィをおこない臨床的検討をおこなった。使用した装置は Maxicamera 400 T (G.E.), LFOV (Searle Radiographics) であり、中エネルギーコリメータを装着した。検査方法は ^{67}Ga -citrate 3 mCi 静注後 72 時間後に全身のスポットを撮像した。異常集積がみられたものは 20 例のうち 16 例で臓器別陽性例数では表在リンパ節 3 例、深部リンパ節 7 例、肺 9 例、肝 1 例、骨 1 例であった。ガリウムシンチにて新たな病巣が検出されたのは 8 例であった。また、異常集積のみられたものは末血白血球数、血清 LDH が高い傾向にあった。

18. 扁平上皮癌関連抗原 (SCC) RIA キットの臨床的検討

陣之内正史 星 博昭 森 由紀子
原田 邦子 尾上 耕治 長町 茂樹
小沢 美幸 渡辺 克司 (宮崎医大・放)

悪性腫瘍 94 例、良性疾患 10 例および正常対照 16 例を対象に血清 SCC 値の臨床的検討を行った。測定にはダイナボット社製 SCC RIA キットを用いた。正常例の SCC 値は $1.45 \pm 0.24 \text{ ng/ml}$ で、 2.0 ng/ml をカットオフレベルとした。頭頸部扁平上皮癌の陽性率は、33 例中 10 例 30% で、stage が進行するほど高くなる傾向がみられた。肺癌の陽性率は、34 例中 14 例 33%。とくに扁平上皮癌では 13 例中 8 例 62% と高かった。食道癌では 4 例中 2 例 50% で、他の悪性腫瘍の陽性率は低かった。CEA 値と SCC 値とは、頭頸部扁平上皮癌では軽度の相関がみられ ($r=0.55$)、肺癌では相関がみられなかった ($r=0.01$)。

19. Neuron-Specific Enolase (NSE) RIA キットの臨床的検討

森 由紀子 星 博昭 陣之内正史
原田 邦子 尾上 耕治 長町 茂樹
小沢 美幸 渡辺 克司 (宮崎医大・放)

悪性腫瘍 94 例、良性疾患 8 例、合計 102 例を対象として、血清 NSE 値の臨床的検討を行った。測定には、栄研の NSE (γ -エノラーゼ) キットを用い、判定は 10 ng/ml 以上を陽性とした。肺癌の陽性率は 32 例中 9 例、28% で、小細胞癌 6 例のうち 5 例が陽性であった。臨床病期別では stage I~II に陽性例はなく、stage III の 11 例中 2 例、stage IV の 18 例中 7 例が陽性であった。NSE 値と CEA 値の相関はみられなかった。肺癌以外の悪性腫瘍は 62 例中 13 例、21% が陽性であり、良性疾患 8 例は全例陰性であった。

20. β_2 -ミクログロブリン測定の基礎的・臨床的検討

吉田 喜策 一矢 有一 綾部 善治
桑原 康雄 和田 誠 松浦 啓一
上山 昭子 (九州大・放)
(同・放部)

ダイナボット社製 β_2 -マイクロ・RIA KIT の基礎的、臨床的検討を行った。基礎的検討では同時再現性、日差再現性、回収率、希釈試験ともに良好であった。健常者 66 名での測定値は $0.80 \pm 0.25 \text{ mg/l}$ (mean $\pm$ S.D.) であり、 1.3 mg/l 以下を正常値とした。臨床例での検討では、主に腫瘍マーカーとしての意義を検討した。その結果、良性肝疾患 95 例での陽性率は 58.9%、悪性疾患 221 例では 61.5% であり、両者で大差なく、また疾患特異性も見られなかった。胃癌、大腸癌 60 例で CEA との相関を、肝癌 74 例で AFP との相関を検討したが、 β_2 -ミクログロブリンとこれらの間に相関関係は見られなかった。